

生体鉱物素材での表現 ―制作を通して考察する―

大阪芸術大学 教養課程 准教授 加藤 隆明

今回の研究は、生体鉱物を使用しての作品制作を行いました。この生体鉱物の選択は近年まで豚真皮を使用しての制作の延長にあります。

制作コンセプトは「自己」が揺らぐ素材を選択し、その性質を表現するというのが一貫してありました。初期のころから素材として稲、金魚、シダ等の動植物、豚真皮などを使用していました。現在は蚕繭、真珠等で、それに付随してうさぎの毛皮、ダチョウの卵、有刺鉄線などを複合的に使用しています。

自己が揺らぐという経験は、中学生の時の開腹手術にあります。術後の皮膚を縫う素材が豚の皮膚で作られていて、それにより抜糸の必要がなく糸は私の体の一部となり、また尿路結石という体内で生まれる鉱石の手術も受けることになりました。この二つの体験は「自己」というものに物理的に違和感を持つことになりました。

「自己」が揺らぐような素材を選択することにより近代思想のモダニズム作品から新たな地平の作品が制作できるのではないかと考え展開しています。

作品の自立性というモダニズム芸術ととれる作品の特徴の一つはオブジェの発見にあると考えています。ダダイズム、シュールレアリズムが作り出したオブジェ(Object)その意味は物、対象物、客体などと訳し、人間と対等にある物として理解できます。オブジェの作品構造は日用品の再構成が基本です。日用品は人間が生産してきた物体で人間の支配下にありその日用品から機能を喪失させること、それによって物体あるいは無意味なものとしか言いようのないものにする事で、人間の支配から自立させ、独立させる作業だったと考えています。

まず生体鉱物について考察してみました。素材に使用している真珠です。真珠はくず真珠と呼ばれているもので本物ですが現時点では真珠としての商品価値はありません。偽物ではないということが重要なことです。偽物の使用はポップアートの特性であるキッシュという概念に近づくこととなります。むしろシュールレアリズムの作品にみられるような人の身近にある日用品、あるいは詩的内容と関連付けられる意味深い商品を構成しての作品に近いのではないかと考えています。

真珠で考察すると生体鉱物というもので、バイオミネラルとも言われています。わたしの経験した尿路結石も同じです。ただ真珠というより正確には貝殻がそれを指し、殻セミや人間の骨、歯も生体鉱物といわれています。

生命というイメージは細胞としての活動が主で鉱物には生命感を投影しにくい、あるいはしないということもあります。しかし骨のない人間が存在しないように、細胞と生体鉱物は一体としてあります。そのような、鉱物であり生命体で象徴的真珠は、結果自己が揺らぐ素材としてとらえ作品の素材としました。

まず、作品についての説明をします。うさぎ毛皮の表面とダチョウの卵の表面に人の輪郭線を真珠で制作した作品3点について真珠の位置が内なる空間ではなく毛皮、卵の表層を境に外部に配置していること、そして真珠は人型の輪郭線として使用されていることで、二重の内と外の見解を見せることにより、曖昧な自己概念を提示しています。

真珠の人型は、ジャクソン・ポロックの「カット・アウト」で謎の人型から引用しています。この謎の人型は、写真に撮られた踊る人のブレをダイナミックに切り取ったのではないかと私は考えています。うさぎの毛皮はヨーゼフ・ボイスのパフォーマンスに出てくる死んだうさぎが見て取れればと考えていました。

有刺鉄線の棘に真珠を被せた作品について、有刺鉄線は人間や一定の生き物に対し空間を分けるものとして使用するもので、その結界を超えようとする時には痛みを伴うものであります。その棘の一つひとつに穴をあけ真珠を被る作業にて、自己と他者の曖昧な揺れを感じることができると考えていました。

今回の生体鉱物を使用する意味は素材自体が生命体と鉱物を包括するもの、あるいは「自己」と「他者」が揺らぐ物として考えられ、それで制作された物体は他者とはならず、鑑賞者に近づく物体になります。

作品の制作の結果として、大阪市内で個人展覧会を行いました。その時に発表した作品は全部で9点程度(複数で1つとしている作品もあります。)出品しました。今まで通りの素材蚕繭を主にした「かぐやー内なる光」2点は真珠素材は使用していませんが、後の作品、素材がうさぎの毛皮、ダチョウの卵の3点、有刺鉄線の作品3点(複数の作品を含む)と乾山、繭、殻セミ、鉛の複合的作品は前回からの作品の展開でもあります。

生体鉱物の素材を使っの作品制作において、制作手順等について報告書に詳しく記載します。